

日本学術会議 課題別委員会 フューチャー・アースの推進に関する委員会
持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会（第3回）
議事要旨

1. 日 時：平成 27 年 11 月 11 日（水）10：00～12：10
2. 場 所：日本科学未来館 VIP 室（2階）
3. 出席者：氷見山委員長、小松幹事、武内委員、田中委員、田路委員、日置委員、毛利委員、山口委員
欠席者：中静副委員長、井田委員、小金澤委員、花木委員、林委員、福士委員、宮寺委員、山形委員
オブザーバー：詫摩雅子、池辺靖、林部尚（日本科学未来館事業部プログラム企画開発課）
事務局：なし
4. 配付資料：資料 1：前回議事要旨（案）
資料 2：IYGU Regional Action Centers (RAC) 説明書
参考 1：委員名簿

5. 議 事：

(0) 議事に先立ち日本科学未来館を見学し、同館が有する多様な機能やインタプリタ等のスタッフの役割などについて説明を受けた。案内は科学コミュニケーターの陳ドウさん。

(1) 前回議事要旨案の確認

資料 1 に基づいて、前回議事要旨(案)が確認され、了承された。

(2) 日本科学未来館スタッフとの意見交換

毛利委員(日本科学未来館館長)：未来館は JST の一部。社会と科学を結ぶメカニズムを開発するのが主な役割。3.11 後、科学者コミュニティと社会との相互作用による「共創」に力を入れており、両者の橋渡しをする人材(コミュニケーター)の育成にも取り組んでいる。展示物の他に研究室を有し、現在 12 のプロジェクトが入居して研究者が直接来館者に話しかけている。

・「対話」に工夫の余地がある。フューチャー・アースのように統合智を必要とするものをコミュニケーションするのは難しい。メイン展示の巨大地球儀は様々な情報をリアルに表示できるので一つのヒントになるが、多様な情報を統合して一つのストーリーが描けるか？

毛利委員：未来館では「つながり」プロジェクトに取り組んでおり、今年度中に自然科学だけでなく人文社会科学も取り込んだ広い意味でのハザード展示が完成するので、期待してほしい。

・「つながり」や生態系のようなシステムが見えづらかった。

毛利委員：物質循環をカーボンサイクルの視点から見る展示などがあるが、目立たなかったかも知れない。

・中教審は「汎用的」能力の向上を目指しており、アクティブラーニングの重視はそれと関連する。学校知と社会知のつながりや教育と認知のつながりも大切ではないか。

毛利委員：「つながり」は未来館の当初からの主要テーマだったが、個々の技術に興味を持っただけで帰る人が多いのが現実。広い意味でのアクティブラーニングをどう俯瞰的につなぐかが課題。

・過去の地球環境の理解に未来館は貢献しているか。natural history、生態系の歴史も大切ではないか。野鳥の観察などで成果をあげている citizen science とのつながりはどうか。市民の先端科学への貢献は考えられないか。

毛利委員：history は上野の国立科学博物館が担当しており、また滋賀県立琵琶湖博物館はまさに citizen science を扱っている。未来館は「語りあうところ」、「もの」中心ではなく、未来社会を描き、行動に変え共に創るところを目指している。

・情報技術をどう社会に活かすかに関心があり、モンゴルの教育の改善やラオスの遺産の保全などに取り組んできた。情報技術のリソースをもっと教員の育成などに活用できないか、科学をどうやって理解の向上につなげるか。

毛利委員：言われたユネスコは science, culture, education を重視している。未来館では

Science に関しては、2017 年に未来館で世界科学館サミットを開催する。Culture に関しては世界遺産に深く関わっている。Education ではESDに力を入れている。

・人文社会系が弱いと感じた。人間社会や文化の視点も必要ではないか。

毛利委員：将来どういう生き方をしたいか、それを思い描ける人、そしてバックキャストイングできる人を育てたい。どういう暮らし方をしたらどういう未来になるか、というつながりを展示したい。「幸せ」をキーワードにして人の生きざまを見るのも意義深いですが、これは数値化ができないが科学コミュニケーターの役割として挑戦させている。

オブザーバーの池辺氏・詫摩氏・林部氏：40名余りいる科学コミュニケーターの取りまとめをしている。科学コミュニケーターは、来館者と対話することで、より深い理解や来館者本人の気づきを促している。展示だけでは扱いきれない部分を補完する存在、点に終わりがちなイベントの間(ギャップ)を埋める存在として科学もコミュニケーターは重要。

(3) 前期提言の実践と普及について

委員長より、前回の分科会の折に実施した公開ワークショップと今回の分科会における日本科学未来館の視察と同館スタッフとの意見交換がいずれも前期提言の実践の一環であること、また各委員の実践活動についても情報・意見交換を続けることが大切であることの指摘があった。

(4) 国際地球理解年 (IYGU) について

委員長より、資料2に基づいて、ICSU、ISSC、CIPSHによる国際地球理解年(IYGU、2016年)およびその活動の拠点となるRegional Action Centers (RAC)について説明があり、当分科会としてそれらがフューチャー・アースをボトムアップで支える有意義な活動であることを確認し、前向きに対応してゆくこととした。

(5) フューチャー・アースの推進に関する委員会の提言(案)について

委員長より、前回の分科会以降に委員から寄せられた提言(案)に対する意見はすべて親委員会の安成委員長に提出されたこと、提言(案)は構成や内容にまだ問題があるので、それらの是正を申し入れたことなどの報告があり、提言(案)の修正版が入手でき次第、更なる修正作業に協力することとした。

(6) 次回分科会について

武内委員が在職する国連大学か東京大学国際高等研究所において1月下旬ないし3月上旬に開催する方向で日程調整をすることとした。

(7) その他

なし